

## 第2章 大滝ダムによる洪水調節

# 大滝ダムによる洪水調節(1)

前回の流域委員会での議論を踏まえ、紀の川の河川整備計画では、対象洪水に対して大滝ダムの治水効果を最大限に発揮させる洪水調節方法を検討することとしました。

大滝ダムについては、洪水調節容量61,000千 $m^3$ で計画され、平成14年度完成予定となっていることから、この所与の治水容量を出来る限り活用することが前提となります。また、ダムの放流量については、大滝ダム下流の河道の流下能力も考慮する必要があります。

# 大滝ダムによる洪水調節(2)

整備計画における大滝ダムによる洪水調節方式としては、操作が確実に対象洪水に対して最大の効果のある一定量放流方式を選定してみました。

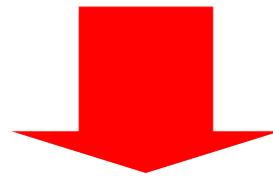
戦後最大実績降雨であるS34. 9の実績降雨(313mm)を対象雨量とした流出解析によって算出した流量をもとに、大滝ダムの洪水調節容量をすべて使用した場合の大滝ダムの放流量は以下のとおりです。

洪水名	大滝ダム		船戸	
	流入量	放流量	ダムなし	ダムあり
昭和28年9月	3660	800	8510	5780
昭和34年9月	6220	2500	9970	6640
昭和36年9月	2300	800	9830	8430
昭和47年9月	5470	1500	11660	8130
平成2年9月	4210	1500	8240	5710
昭和33年8月	3550	1300	6380	4580

# 大滝ダムによる洪水調節(3)

大滝ダムの放流量は、以下の点から  $2500\text{m}^3/\text{s}$ としてみました。

- ・対象5洪水をすべて満足する放流量(放流量が最大)
- ・放流量が大滝ダム下流河道(20~30年後)の流下能力の範囲内



2,500 $\text{m}^3/\text{s}$ 一定量放流